



じてん てつがく き  
事典 哲学の木

2002年3月11日 第1刷発行

2002年5月31日 第2刷発行

編集委員

永井均  
中島義道  
小林康夫  
河本英夫  
大澤真幸  
山本ひろ子  
中島隆博

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社 講談社  
東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112-8001

電話 出版部 03-5395-3521  
販売部 03-5395-3622  
業務部 03-5395-3615



印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大日製本印刷株式会社

©KODANSHA 2002 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、  
小社書籍業務部宛にお送りください。  
送料小社負担にてお取り替えいたします。  
なお、この本についてのお問い合わせは、  
現代新書出版部宛にお願いいたします。  
本書の無断複写(コピー)は  
著作権法上での例外をのぞき、禁じられています。

N.D.C.100 1086p 22cm  
定価はケースに表示してあります。

ISBN4-06-211080-6(現新)

media

# メディア

記号  
技術  
情報

吉見俊哉

メディア(media)はラテン語の medium(「中間の」を意味)から派生した言葉で、16世紀後期から使われ始め、17世紀初期までに介在的もしくは中間的な働きを意味するようになっていた。レイモンド・ウィリアムズはその例として、バートンが「視覚には対象、器官、メディウムという三つのものが必要である」(1621)と語り、ペーコンが「言葉というメディウムによって表現された」(1605)と語ったことを挙げる。これらの用例からは、初期にはメディア概念がいわゆる伝達メディアやマスメディアに限定されたものではなかったことがわかる。むしろこうした用法の一環として、18・19世紀に新聞をメディアの一種として理解する視点が広がり、20世紀までに一般化した。とりわけ19世紀からのマスメディアの発達は、こうした情報媒体としてのメディアの意味を強めていった。他方、そうしたなかでメディアのもともとの概念、つまり意識や思考とその対象物を媒介するなにかという概念は、しだいに背景に退けられたいっただよに見える。

## メディアが思考を変える

20世紀半ばにマクルーハンが提起したメディア概念は、このように近代を通じて背景化されてきたメディア概念が、形を変えて甦ったものともいえる。たとえば彼は、「メディアはメッセージ」だと主張する。これが意味するのは、メディアが「個人および社会に及ぼす結果」というものは、われわれ自身の個々の拡張によってわれわれの世界に導入される新しい尺度に起因する」ということである。工場で菓子が生産されようと、自動車が生産されようと、オートメーションという装置は同じように人々の環境に対する関係を変化させる。同様に、テレビでどんな番組が放送され、電話で何が話され、本に何が書かれていようと、それぞれのメディアはその特性に応じて感覚に作用する。メディアはわれわれの環境世界に関わる仕方を変え、身体や思考の形式にも決定的な変化をもたらすのである。

しかもここでいうメディアとは、テレビやラジオ、新聞のようなマスメディアだけでなく、書き言葉や話し言葉、自動車からファッションまでを含んでいた。われわれの経験する社会的リアリティは、それを織り上げる言説のメディアによってマテリアルに条件づけられている。た

とえば話し言葉というメディアによって媒介される世界と、書き言葉というメディアによって媒介される世界では、人々は根本的に異なる認識や思考の地平を生きており、同じように見えるメッセージでも、メディアによってまったく異なる作用の次元を含んでいる。だからこそ、社会的な現実の構成にとって主導的なメディアが活字から電子に移行することは、われわれの意識や思考のコミュニケーション論的な地平を根底から変えないわけにはいかないのである。こうしてマクルーハンは、機械による外爆発の時代から電気による内爆発の時代への、活字による線状的・視覚的な知識の時代から電気による非線状的・触覚的な知識への移行を強調し、こうした内爆発によって、やがていかなる「視点」とも無関係に人々が状況への参与を強いられることになる」と論じた。

一方で、マクルーハンのメディア概念は、ハロルド・A. イニスによってすでに考えられていた地平を尖鋭化したものであった。イニスは文明史をたどり直しながら、それぞれの時代の文化や人々の思考においてメディアが果たしてきた重要性を強調した。ある一定の傾向性をもったメディアの長期間にわたる使用は、そのメディアでコミュニケーションされる知識の性格がある

程度まで決定するのである。こうしたなかで、イニスは時間を越えた伝達に適したメディアと空間を超えた伝達に適したメディアを区別して、近代化が一貫して前者から後者へのメディアの重心の移動を伴ってきたことを明らかにした。

他方、マクルーハンと同じ頃にエリック・A. ハヴロックは、ホメロスの詩が文学作品という以上に人々の思考や記憶、社会的な現実の成り立ちを規定する形式となっていたことを示し、話し言葉から書き言葉へのメディアの転換が古代ギリシアの社会のあり方をどのように根幹から変えたのかを明らかにした。「詩の生々しい朗誦は、ギリシアの文化類型にとって、われわれが一般にそうだと考えるよりもはるかに中心的」だったのであり、メディアのモードが口承から文字に移行していくことで失われたのは、伝統や集団的なアイデンティティを遂行的な発話のなかで確認していく能力、さらには韻律によって思考し、記憶し、関係を組織していく技術であった。プラトン以降の哲学者たちが、書くこと／読むことを通じて発明していったのは、このような「詩の一体化に挑戦し、人々をその習慣から引き離し」、「私は私であり、固有な自律的小宇宙であり、私がたまたま覚えていることに左右されずに、話し、考え、行動できる」主体そのものであったのだ。

このような議論を受けて、ウォルター・オングはメディアの発展史を、①口承的、②筆記的、③活字的、④電子的という四つのモードが積み重なった過程として把握し、言語表現のメディアがわれわれの思考と深く結びついていることを示した。たとえば、口承的なメディアから文字的なメディアへの移行は、社会的現実の成立平面を深いところから変容させた。話し言葉にはいくつかの常套句があり、人々の思考はそれらを組み合わせることで成り立っていた。ところが文字は、言葉をそれが語られる状況から分離し、口承の知がもつ力動的な構造を解体する。他面、人々はそうすることで、幾何学的な図形理解、範疇的な分類、形式論理的な推論などの新しい思考の地平を手に入れたのである。

このようなわけで、メディアとは、伝達の手段というよりも身体が世界にかかわる仕方を構造化する制度である。メディアの変容は、世界を思考する身体技術の変容にほかならない。だから、たとえば「書くことを内面化した人は、書

くときだけではなく話すときも、文字を書くように話す。つまり、かれらは程度のちがいはあれ、書くことができなければ知らなかつたような思考や言葉の型にしたがって、口頭の表現までも組織している」のだ。

### カルチュラル・スタディーズの成果

以上で述べたようなメディア論の系譜と並び、今日、メディアを考えると欠かすことができないのは、1970年代以降、英国を中心にカルチュラル・スタディーズが進めてきたメディア研究の視座である。この流れの一方の先駆けとなったレイモンド・ウィリアムズは、文化がけっして外部の政治経済的な力によって決定される観念的な事象ではなく、それ自体、物質的な力として存在していることを強調した。言語や表象、テキストの秩序を何らかの深層の物質的な過程に関係づけられる表層の秩序と見るのではなく、あくまでそれら自体が現実を成り立たせているマテリアルな過程として考えていくこと。このような観点からするならば、物質的な過程としての言語やテキスト、文化を成り立たせているメディアは決定的な重要性を持つ。それは単にメディアが社会に生産・再生産されるというだけでなく、それ自体、社会を再生産していく生産手段でもあるのである。

コミュニケーションの物質性を強調するウィリアムズの議論は、一見、同時代のマクルーハンのメディア論とも通底してはいる。しかしウィリアムズは、マクルーハンがメディアを最初からある固有の特性を持ったものと見なし、そもそもメディアが様々な社会的実践の絡まりあいのなかで構成されていることを理解していないと批判する。むしろメディアとは、様々な政治的、経済的、社会的な力が絡まりあう場の中からこそある一定の姿をとるものであり、最初からその制度的形態や利用のされ方が決められているわけではないのである。だから彼は、技術決定論と並んで技術変化を何らかの深層の社会過程によって決定される徴候と見なす立場も批判する。これらの立場は、いずれも技術を社会から切り離し、一方に他方に対する決定力を与えてしまう。しかし、技術と社会は、歴史の積層のなかで入り組んだ関係を結んでいる。ウィリアムズはこのようにしてメディア研究を技術的あるいは社会的決定論の呪縛から解

き放ち、現代のメディアのなかに、既存の放送制度や受容のパターンとは異なる可能性を見いだそうとしていたのである。

他方、カルチュラル・スタディーズのもう一方の流れで重要なのは、いうまでもなくシュアアート・ホールのエンコーディング／デコーディング理論に始まるパーミンガムの現代文化研究センターを拠点としたオーディエンス研究の試みである。ホールはこのエンコーディング／デコーディング理論で、コミュニケーション過程を、相互に結びついてはいるが相対的な自律性をもって節合される諸実践を通じて生産・維持される言説の構造的な秩序として把握した。ここにおいてマスコミュニケーションは、社会的文脈から抽象された「送り手」から「受け手」へのメッセージの伝達ではなく、現代資本制に深く埋め込まれたテキスト＝記号の生産と消費の節合過程として把握されるのだ。この場合、コミュニケーション過程の一方にあるのは、単一の主体としての「送り手」というよりも、テキスト生産に向けて節合された諸契機の複合的な過程である。そして、このコミュニケーション過程の他方には、抽象的な個人としての「受け手」ではなく、様々に状況づけられた諸主体によるテキスト消費の過程(デコーディング)が存在する。メディアはその生産と消費の両面で、様々な解釈と記述、実践がせめぎあう記号的な場なのである。

1980年代以降、ホールの影響を受けながらカルチュラル・スタディーズのメディア研究が発展させていった視座は、「効果」や「機能」を主題に実証を重ねてきたマスコミュニケーション研究とは決定的に異なるし、マルクス主義の立場から文化産業のイデオロギー支配を批判したアプローチとも一線を画す。さらにそれは、記号論や精神分析の手法を導入してテキストのイデ

オロギーを浮かび上げさせた構造主義的なアプローチにも重なるわけではない。たしかにカルチュラル・スタディーズは、第一段階ではこうした記号論や精神分析のアプローチを導入したのだが、第二段階では社会的な主体としてのオーディエンスに焦点化し、テキスト論的な世界の自己完結性に亀裂を入れたのである。

カルチュラル・スタディーズの一連のオーディエンス研究に対しては、焦点をテキストの意味作用の次元に限定しているとの批判もある。それはテレビを「どう観るか」の政治性を問題にしたが、そもそも「テレビを観る」実践そのものの政治性は視野の外に置いてきた。しかし今日、日常生活のなかでのメディアをめぐる交渉は、単にテキストの解釈をめぐるだけでなく、ハビトゥスのレベルで繰り広げられているのだ。実際、80年代末以降のメディア研究は、テキストの読みをめぐる解釈的な視座から、そうした読みがいかなる社会＝技術的な場に位置づけられているかを問題にする視座へと向かってきた。たとえばデヴィッド・モーレーは、居間のなかでのテレビをめぐるジェンダー間の葛藤に焦点を当て、ロジャー・シルバーストーンは、技術の消費が社会的な主体の産出をも含むことを示す。今日のメディア研究は、メディアのテクスチュアルな構造とテクノロジー的な作用、オーディエンスの身体性をめぐる複雑な関係を日常的実践の内側から捉え返す方向に向かっているのだ。

■ハロルド・A. イニス(久保秀幹訳)『メディアの文明史』新曜社、1987 マーシャル・マクルーハン(栗原裕、河本仲聖訳)『メディア論』みすず書房、1987 ウォルター・J. オング(桜井直文他訳)『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991 エリック・A. ハヴロック(村岡晋一訳)『プラトン序説』新書館、1997 吉見俊哉『メディア・スタディーズ』せりか書房、2000

melancholy

メランコリー

▶ 精神分析  
哲学

石光泰夫

ヘルメス学と精神分析学の解釈

古代から連綿とつづくヘルメス学の隠喩体系(と

くに「三倍も賢いヘルメス」という名のヘルメス・トリズムギストスのそれ)では、メランコリーは乾いて冷たい土星のもとにあって、そのままざしはひたす